

福祉施設実習指導教育に資する映像コンテンツの 製作と実習日誌の遠隔地指導への取り組み

——文部科学省現代 GP プログラム「ニーズに基づく人材育成を
目指した e-Learning Program の開発」実践力をつける
実習教育総合支援システムの取り組みから——

岡 佐智子*・大倉 孝昭*・農野 寛治*
小東 奈央*・山岸 蘭奈*・農端 祥子*
三好眞由美**・藤永 弘美**・武市至穂里***

キーワード：福祉施設、実習指導教育、e-Learning

1. はじめに

全国保育士養成協議会では「保育実習指導のミニマムスタンダード」が検討され、実習校における実習指導への取り組みに一定の標準が示された¹⁾。保育をはじめ施設養護の分野では、ますます職員の専門性が問われている状況にあり、これら社会福祉専門職の現場では即戦力を発揮できる人材が求められるようになってきている。一方、近年の学生の生活体験の乏しさや少子化の中での育ち方では人間関係の希薄さや他人への配慮ができない学生が多くなったこともあって、保育士養成校は実習指導の基礎的条件を整備する必要に迫られミニマムスタンダードが示されたのである。

本学部も保育・社会福祉に関する専門理論や技術・技能を習得した学生が、各実習現場において存分にその力量を発揮するだろうと実践の場へ送

り出してきたが、現代の養成ニーズにきめ細やかに、かつ的確に対応できているかは心許ない面もある。大学等の高等教育機関で行われる実習指導教育の内容と方法も、より現場に即した知見のもとで、実習現場と緊密な連携にもとづいたものにしていく必要がある。しかし、現状の福祉施設実習教育指導を省みると、二つの大きな課題がある。ひとつは、講義だけでは学生自身が実習現場で展開される実習のイメージが掴みにくいということ。もうひとつは、実習期間中に大学の担当教員が実習指導に関与できるのは、実習巡回時のみであり、時機に添った学生の指導が難しいという点である。

今回、本学は文部科学省現代的教育ニーズ支援プログラムに応募し“実践力をつける実習教育総合支援システム”が採択（平成17年度から3年間）された。この支援システムは教諭・司書・社会福祉士・保育士など対面型で高いコミュニケーションスキルが要求される職業を目指す学生の実習教育のために有効なコンテンツとシステムをつくるというものであり、実践力を養う実習支援の人

*大阪大谷大学教育福祉学部

**児童養護施設清心寮

***盲ろうあ児施設法然寮

材養成課程を4階層にモデル化して作成された。まず論理的言語操作スキルの養成を基礎教育におき、その上に実習事前指導、実習中の指導、実習事後指導へと順次実力が養えるように積み重ねていくという段階的学習指導システムである²⁾。このような実践研究の機会を得ることができたので、①福祉施設実習指導教育に資する映像コンテンツ（保育現場へ出た実習生の研究保育や実習風景）の収録と、②収録映像にアノテーション³⁾を付与してのWeb教材化、③実習日誌の遠隔地指導への取り組みを行うことができた。以下に、それぞれの取り組みを紹介し、成果と課題について報告する。（岡佐智子）

2. 福祉施設実習指導教育に資する 映像コンテンツの収録

学生が福祉施設で実習を行う様子を映像化することは普通相当の困難が生じる。まず第一には、個人情報保護することであり、特に利用者の肖像権の問題と重大なプライバシーへの配慮が求められることである。今回、施設を利用している子どもの顔は極力映像に入れなかったこと、また画面に入ってしまった場合、個人を特定できないほどに画像処理を行うという条件の下で施設側の了解を得て、撮影の許可を得た。

次に問題となるのは、どのような場面を映像に切り取らせてもらうのかということである。今回、映像化されたものは、次のような場面である。保育所実習にあつては、実習学生が絵本の読み聞かせや手遊びなどを取り入れた研究保育を行っている様子と実習学生が子どもたちの昼食場面にかかわっているような日常の保育風景を切り取った。施設実習では、学生が児童養護施設での実習全体の流れが疑似体験できるように、①実習に入るまでの事前オリエンテーションの様子、②実習初日に施設の玄関に入る直前から午前中の様

子、③初日の午後（昼食後）から実習を終えて宿舎に戻り、実習日誌を書き始めるまで、④子どもとのかかわりの様子として、小学生の学習指導の場面、⑤実習巡回指導の様子、⑥実習の最終日の午後の様子と時系列で起きるであろう過程にそった風景を切り取った。そしてそれぞれの場面は、実習事前指導教育を受ける学生が、その様子をイメージできる範囲で、数分から長くても20分程度に編集した。（なお各収録期間については各実習施設を利用していた子どもの特定を避けるために明示していない）

さて、①実習に入るまでの事前のオリエンテーションの様子については、特にどのような説明が行われるのかを知り、また学生側から積極的に何を質問すべきかを考えるためには必要な場面であると考えたからである。②実習初日に施設の玄関に入る直前から午前中の様子については、玄関での挨拶や自身の靴の処理、事務所等での施設長、指導者への挨拶、必要種類の提出、宿泊場所の確認や自身の荷物の処理、設備等の使用に関して注意事項の伝達を受けることなど、非常に具体的で重要な事項が含まれるため、玄関に入る直前の施設に向かう実習生の姿から撮影をした。市販の実習指導教材ビデオでは、施設の紹介が半分、実習生の仕事の解説が半分という構成で作られたもので、実習生がどのような行動をとらなければならないのかを丁寧に映し出したものは、なかなか見られないが、非常に重要な場面である。実習初日を午前と午後とに分けたのは、午前中は施設内の清掃や子どもが帰ってくるまでの準備等、子どもがほぼいない状況で実習生は何をするのかを理解するためであり、午後は子どもが施設に帰ってきてときの出迎え（子どもと初めて出会う）の場面や、夕食時等の実習生の自己紹介など、これも午前とは異なる緊張感のある場面が次々と展開されるからである。一番頭を悩ましたのは、④子どもとのかかわりの様子である。子どもの顔や姿を極

力映像化しないという条件の下で、何を映すかということである。結果、実習生が小学生の子どもの宿題を見ている場面を切り取ってその雰囲気だけを醸し出す程度の映像となった。⑤の実習巡回指導については、施設側の指導者と大学の実習巡回担当者が同席の上で実習学生に指導をしている様子を映像化した。⑥の最終日の午後の様子も書類の受け渡し、食費等の精算など事務的な手続き、宿舎の掃除等、実習学生が最低限しなければならないことなどを映像化した。(農野寛治)

3. 映像コンテンツの利用

▼保育所実習の映像

保育所における収録画像は、これから実習に行く学生と実習から帰ってきた学生ともに、各授業の中で視聴した。実習先での研究保育や日常の実習風景をビデオ収録した動画を見ることによって、実習前の学生には仮想実習体験学習をするこ

とができた。また実習後の学生は画面上の実習生の動きを見ることによって自分自身の実習態度や園児への接し方を振り返ることができ、保育士養成校が目標としている反省的実践家の養成に大いに役立つ教材であることが実証され、学生への指導上良好な結果を得た。さらに、アノテーションを付与した教材は画面を見ながらコメントを同時に読むことができるので、付けられたコメントを参考にしながら実習生の動きを把握することができた。また、自分なら同じ画面にどのようなコメントをつけるかを考えることや、実習生の動きや園児の動きに焦点を絞って学習することもできた。さらに、実際の実習現場の様子を理解するだけでなく、実習評価項目を参照しながら実習の成果を検討し、その評価を理解することや、収録画像に対する指導者や先輩などの評価を参考にすることができる。保育の実際の場面を理解するとともに実習への取り組み方を疑似体験し、事前と事後指導の理解と反省、さらには実習の事前と事

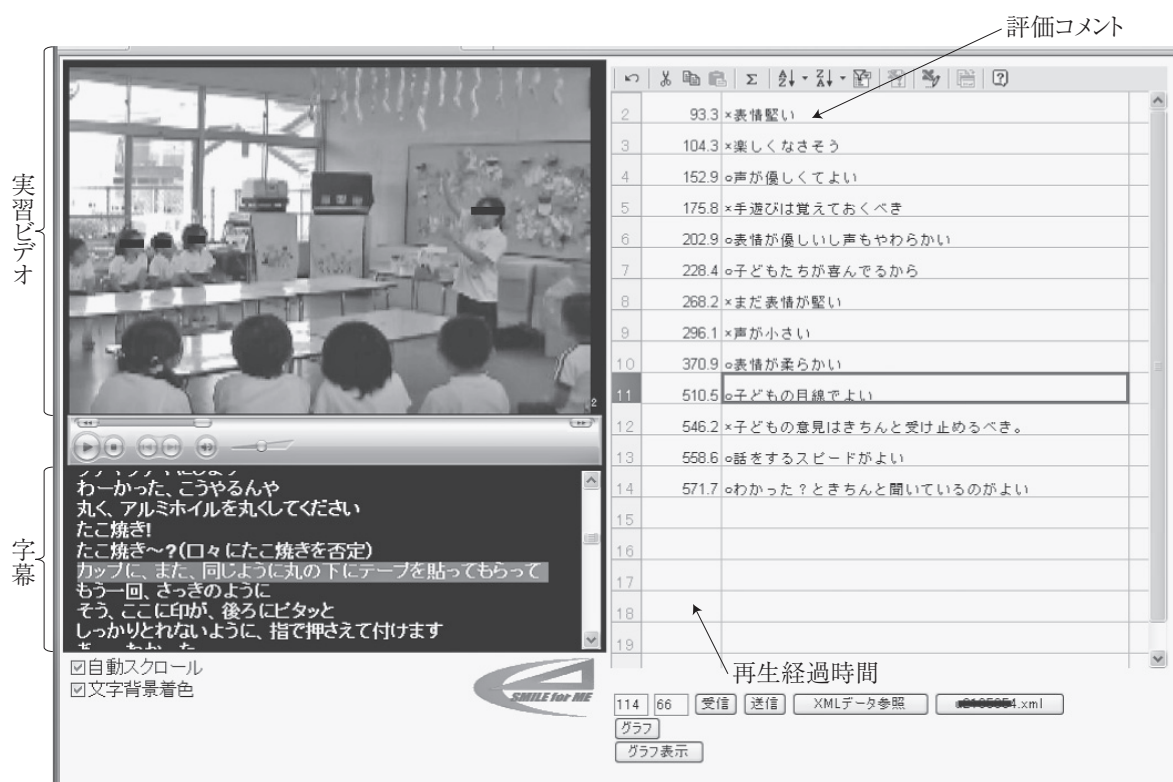


図1 保育所における設定保育の場面

後において実習課題を何度も繰り返してシミュレーションしながら学習に取り組むことが可能である。また、このようなコンテンツが蓄積されることによって、より多様な場面での保育の展開を事前や事後に、繰り返し学ぶことができるようになるだろう。(岡佐智子)

▼児童養護施設実習の映像

児童養護施設実習で得られた一連のコンテンツに対して、録画された各場面のか所において、どのようなことを配慮しなければならないのか、また撮影された各実習生の言動はどのように評価できるか等のコメントを、映像コンテンツの中に挿入する予定であるが、施設側と大学側とが協働して検討することにしていないため、今回の拙稿期限には間に合わなかった。しかしこのような教材化を積み重ねることで、実習に行く前の学生に施設実習に対する具体的なイメージを与え、実習中に学生が会うであろう場面におけるさまざまな留意点が浮かびあがってくるだろう。これは学生のみならず、実習指導や巡回指導を行う教員にとっても貴重な資料となる。ただし、今回の取り組みは、やはり完全なものではない。なぜなら、実習期間中に起きている子どもとのかかわりそのものを映像化することが困難であるからである。衣食住をはじめとする生活そのものの中で、子どもの



図2 施設実習の収録場面

言動はさまざまなものが起きてくる。特に実習生が、かかわりにとまどうような場面（子どものケンカや大人に対する暴言などの問題行動）は、普通は映像化し難いほど子どもの個性やプライバシーにかかわるものとなる。それは、むしろ専門職の研修レベルのものとなるだろう。(農野寛治)

4. 児童養護施設実習収録画像を見て

児童養護施設の実習のしんどさは、なんと言っても、まったく知らないところで24時間住み込みの生活をしながら実習をすることである。施設で生活している子どもたちは、もちろんのこと、私たち施設職員も新任の頃は、生活環境が全く変わってしまうことのしんどさを、みんな体験し常に大きな課題である。初めての環境に入っていく緊張感は子どもも実習生も同じであろう。特に「生活」とは「その人が生きてきた歴史」であり、その中で「一人ひとり違ったものを身につけてきた」ということもある。まったく知らない場所・人・ルールなど不安材料を挙げればきりが無い。その上に実習生という立場からお客様ではなく、施設実習において学ぶべき課題は山積みされている。その意味から事前に施設実習というものが具体的にどのように展開していくのかという情報を得ておくことは、実習生にとって大変重要になってくる。

特に一般的に児童養護施設は、まだまだ理解されていないのが現状で、学校の講義だけではその生活は想像もできないであろう。しかし、実習は否応なく期限がくれば始まる。実習生の気持ちは、子どもたちに受け入れてもらえるのか、どんな子どもたちがいるのか、職員はどうなのか、自分はやっていけるのかとなど、次々に不安が押し寄せてくるのではないだろうか。受け入れる施設の側としても、実習生の心情を理解したうえで事前のオリエンテーションを通じ、できる限り不安

を軽減できるように努力はしているが、限られた時間の中で十分な対応ができていないとはいえない中で、不安や緊張感を抱えたまま実習に取り組まなければならない現状である。そして実習が始まれば、次々に覚えることがあり、生活リズムをつかむ余裕すらなくても、子どもは容赦なくかわりを求めてきて、落ち着いて振り返り考える間もなく振り回されてしまう。気づかないうちにすごく疲れている自分に気づき「しんどいな」と思うが、でもまだ実習は残っている。そんなときに学校の先生が実習先を訪問してくれて話を聞いてくれる。くじけそうだった気持ちが楽になって、がんばろうと思う。後半になると、生活にも子どもたちにも慣れ、自分を取り戻し、実習が楽しく感じてくる。最終日には仲良くなった子どもたちとの別れが辛い。そして、やり遂げた達成感の後になってジンワリと押し寄せてくるのではないだろうか。学生が実習で得るものは大きい。事前に知っていることが多ければ多いほど、実習に取り組んだときの力になると思う。今回、画像を拝見し、実習生が事前にみておけば実習前の不安感や緊張の軽減になるだろうし、施設での業務の多さも理解でき、取り組む姿勢にもつながるものだと思った。また何よりもやり終えたときに得るもの大きさを知ることによって、「がんばろう!」「やるぞ!」という意気込みをもって実習に挑めるのではないかと感じた。

(三好真由美・藤永弘美)

5. 実習日誌の遠隔地指導への取り組み

▼問題設定

これまで施設実習では、その特殊性（実習期間中は実習生が施設に泊り込む、実習担当職員が期間中に交代する）から、大学の実習担当教員や施設の職員が実習期間中に即時的・継続的に実習指導を行うことが困難で、実習終了後に提出された

日誌を読むことにより、実習過程での問題を事後に知るといふことしかできなかった。実習の学習効果をあげるために、問題発生からそれに対する指導までの時間を短くしたい（その場で指導ができるのが最善であるが、少なくとも1日単位で可能化したい）、関連職員間で問題・指導内容を共有したいという問題解決の要望があった。また同時に、本学の現代GP事業においては“実習過程を次世代の教材として活用できるよう、時間経過に沿ってあらかじめ類型化された記録とすること”を目指している。これまでの手書きの日誌では事後活用が困難で、結果的に日誌は“個人資産”になってしまい、次世代が事前学習や実習中の事例データベースとして活用することは困難であった。

▼ICT (Information and Communication Technology) 活用による解決

これまで紙の“日誌”に留まっていた、実習記録を学生と施設の実習担当職員、大学の実習担当教員の三者が同報メールの添付ファイルを利用して共有しながら教育指導を行い、同時にその内容を事例データベース化するための内容類型化実証実験を行った。現在の技術で設計を行う場合、Web 2.0の手法を取り入れて入力・評価や閲覧の組み合わせをユーザごとにその権限に合わせて個別ページを生成する手法をとるのだが、今回は以下のような条件を勘案して設計した。

(1) PCをほとんど利用しない学生も多く、PC利用に抵抗のある学生が多い（PHSデータ通信カード付きノートPCを大学から貸与するが、通信特性を理解するのが難しい）

(2) 紙の実習ノートから大きくイメージが変わることを避けた（“紙の実習日誌”が“パソコンによる実習データ記録”に変わる＝“難しい”）

(3) 実習生の負荷を増やさない（慣れない環境で朝から夜遅くまで子供達に対応し疲れている）

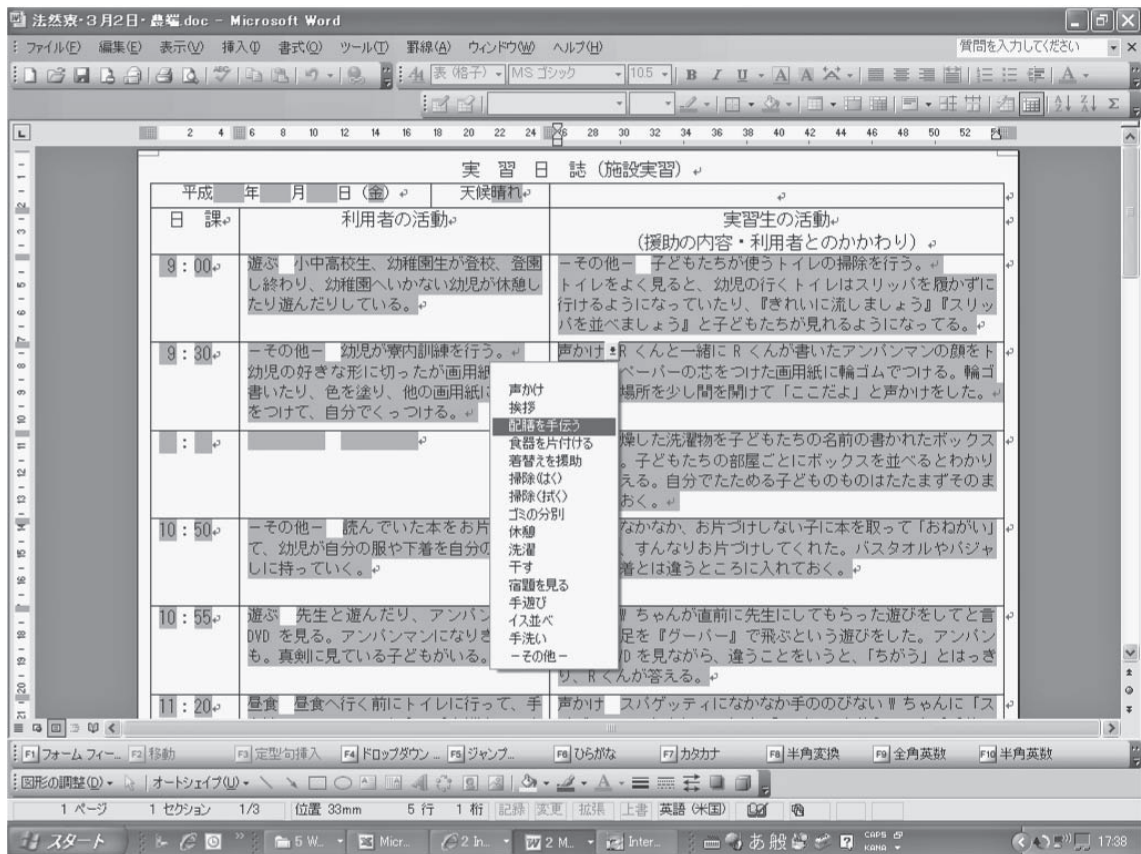


図3 実習日誌の遠隔地指導①—日誌の部分（活動内容は、リスト Box から選択）

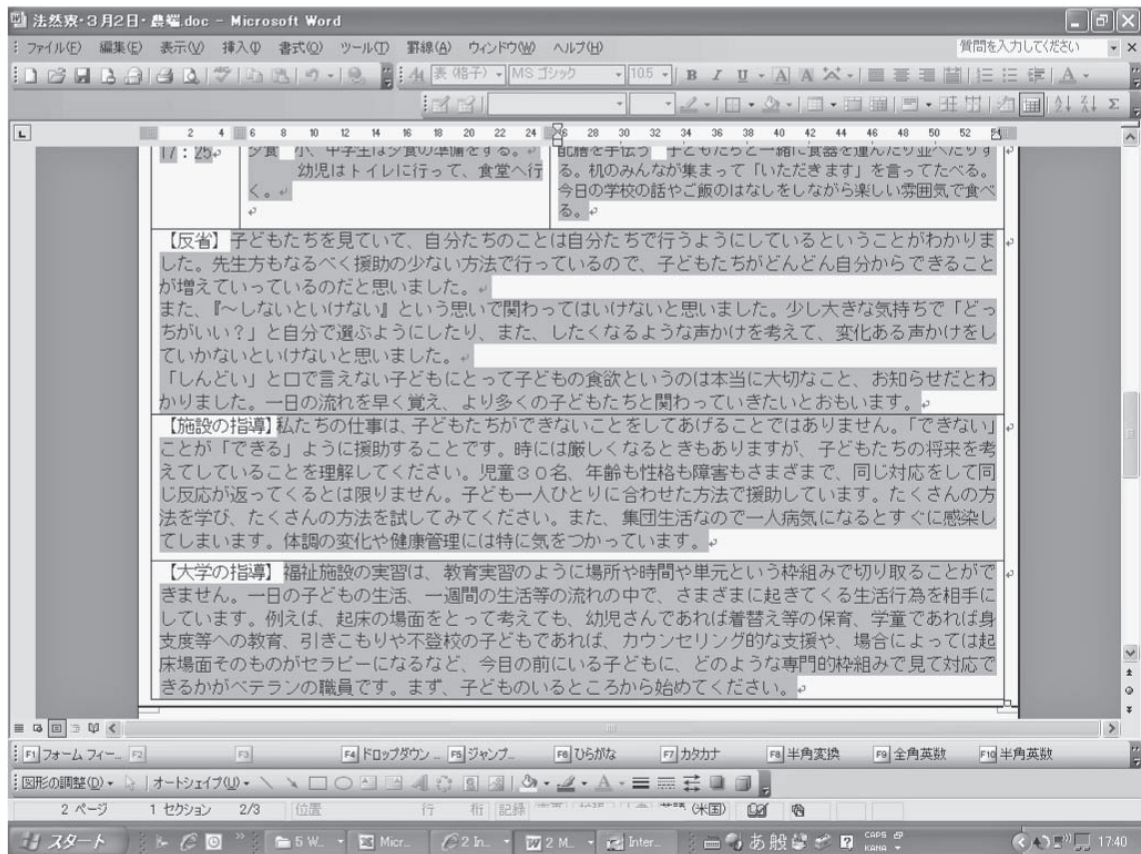


図4 実習日誌の遠隔地指導②—学生・施設指導者と大学指導者のコメント

(4) 実習先でインターネット環境が安定しない恐れがある

その結果、図3のような Word の文書（テンプレート）を用い、時間軸に沿って項目を選択してその内容と並べて書き込む。書き込んだものを文書ファイルとして保存し（もし通信が不安定でも記録は残る）、メールに添付・送信するという基本的な方式とした。（大倉孝昭）

6. 実習担当職員からのコメント

このたび、施設実習の遠隔指導のご依頼を受け、とても画期的な取り組みだと感じました。私が、法然寮に勤めて9年になりますが、このような取り組みは初めてでした。遠隔指導の良かった点として、「大学側の指導者」「実習生」「施設側の指導者」の三者が、リアルタイムに意見交換ができたことです。これまで、実習訪問などの機会に限られた時間の中で意見交換できたとはいえ、一日一日を振り返り、意見交換することは難しいことでした。私自身も農野先生から貴重なご意見を聞かせていただき、大変勉強になりました。メールでやりとりをしていたせいか、他の実習生さんに比べて、親しみを感じました。その反面、メールでのやりとりが当たり前になり、実習中にコミュニケーション不足になってしまったのが、残念な点でした。その他、遠隔指導の改善点を指摘させていただくと、実習日誌を添削すると上書きされてしまい、添削し辛かった点や送信に時間がかかったこと、パソコントラブルが多かった点です。また、当施設は、不規則な勤務形態であり、実習担当職員が毎日勤務しているわけではありません。その日の実習時間と同じ勤務形態の職員が実習指導をするという形をとっているため、指導者（パソコン使用者）を一人に限定されていた点が、とても不便だと思いました。もっと複数の職員が参加できれば、より深い指導ができたのでは

ないかと思います。実習指導をする中で、幼稚園や保育所の実習に比べ、施設実習に臨む前には不安や戸惑いを感じるという声をよく聞きます。施設での実習は想像がつかず、不安を抱くのは当然のことでしょう。もっと施設そのものを理解し、もっと身近に感じてもらいたいと思います。子どもたちの「家」の中に入って、子どもたちと「生活」を共にするのですから、他では味わえない体験ができると思います。私は、この9年間で、「生活」を共にするだけでなく、子どもたちの「人生」も共にし、たくさんの感動や喜びを実感してきました。施設実習を通して、たくさんの学生の皆さんに施設を理解してもらい、施設職員という職業に魅力を持ってもらいたいと思います。（武市至穂里）

7. 実習日誌の遠隔地指導を体験して

初め、日誌をパソコンでつくってもらいたいという話を聞き、私自身、パソコンの扱いには自信がなく、「日誌作成中にパソコンにトラブルが起きたらどうしよう」「ちゃんと送れるのかな」などの不安はありましたが、先生方が「何かあったらここに連絡下さい」などの、いろいろな配慮があったこともあり、日誌作成時には特に困ったことはなかったと思います。でも、送信の時に送り方を忘れてしまって、「どうしよう…」ということになりましたが、一緒に実習をしていた人に教えてもらったのでなんとかその場をしのぐことができました。でも、私の後に実習をした友達は、一人でパソコン日誌を作成するという事だったので、いろいろトラブルがあったようです。なので、同じ期間実習をする人、最低2人以上はパソコン日誌をしてもらうようにした方がいいと思います。せめて2人いれば、何かあった時でも教え合いができるので、実習生としても心強いと思います。

改善してほしいことは、こちらが送信した日誌に対しての指導・助言メールの返信がとても遅く、最終日の前夜に一気に4日分ほどの返事が送られてきたので、もっと早く返信してもらいたかったことです。実習も終わり、自宅に帰ってから返信文を読んだということもありました。私としては、送ったら次の日には返信がくるものだと思っていました。そうでないと、パソコンで日誌を送っている意味がないように思います。せっかくの先生の指導を次に生かすこともできないまま、この実習が終わってしまったので、私自身、少し悔いの残るところがありました。でも、実習中に、「パソコンの調子はどうですか。実習はどうですか。」と気遣って、メールを送ってくださった先生もいて、私の気持ちが沈んでいた時に励ましのメールを送ってくださって、すごく救われた気持ちになりました。そういった面では、パソコン日誌をしてよかったと思いました。(小東奈央)

私は、普段、パソコンをあまり使うことがなかったのですが、不安な気持ちでいっぱいでしたが、日誌を書くことによって、使わなければいけないという気持ちになり、慣れていくことができました。そして、たくさんの先生方に協力していただき、指導をしていただきました。今回、実習日誌を書くことで、パソコンに慣れた、先生方と連携できたということが私にとって大きなプラスとなった点でした。

しかし、いざ実習が始まると、パソコンを一人で扱うことは難しいものでした。実習が終わり、日誌を書くのは夜中になってしまうので、わからないことがあり、先生に尋ねても、その日のうちに返事は返ってこず、手書きで実習先の先生にお渡しすることもありました。そして、パソコンを使って、先生に日誌を送信しても、次の日に返事は返ってこず、何日かまとめて返ってきました。パソコンを使って実習日誌を書くことで、その都

度、指導ができるということが利点だと聞いていたので、何日も経ってから返事が返ってくるのでは、パソコンを使う意味があるのだろうかという疑問に思いました。また、実習先の先生からパソコンの扱い方について質問されても、私もわからず、一緒に悩んだこともありました。実習に行く前にパソコンを使って先生方と練習してみるという期間は、私の自宅は電波が悪く、接続することができなかったということと私に知識がなかったからです。

パソコンを使った実習指導は、先生と生徒の連絡がスムーズにいき、生徒自身に困らないだけのパソコンの知識があれば、より良いものになるだろうと思いました。私のパソコンへの理解が不十分なことから、困ったことや戸惑うこともありましたが、たくさん協力してくださった先生方、ありがとうございました。(山岸蘭奈)

今回のパソコンを使っての実習日誌は私にとって、とても行いやすい方法でした。まず、時間の短縮につながった点です。書き始める時、フォーマットがあり、項目ごとに選べるようになっていたので、すぐに書き始めることが出来ました。また、普段の実習日誌では構想をして、下書きをして、清書をするという順序で行っています。それは、とても時間がかかり、ほかにも行わなければいけないこともあるので、寝る時間がなくなってしまい、実習中は睡眠時間が少なくなっています。しかし、パソコンを使うことによって、清書をする必要がなくなり、また、間違えても最初からやり直しをしなくてもすぐに書き換えることができました。

次に、実習担当の指導員の先生とパソコン上ですが、毎日関わった点です。担当の先生が出勤していない時でも毎日、指導、コメントを行ってくれることにより、次の日にすぐに実践していくことが出来、どのように関わるか、どのような実習

にするのか考えられるようになりました。大学の教授からの指導には、解決策のヒントがあったり、こどもの行動や心理を深く考えなければならぬと、思われました。実習先と大学側からの二つの指導があったので、私にとって、とても実り多き実習になりました。また、書いたデータを自分自身が持っているので、以前の活動、関わり方を確認して生かせ、また、次の日のイメージ作りにもつながりました。しかし、パソコンの容量がはいらなくなり、終わってからのやりとりが出来なくなってしまいました。パソコンについてあまり知識がなかったため、私自身で解決することが出来ず、大学と連絡を取り合ったりと、少し大変でした。

これがもし、実習中になっていたら、と考えると改善しなければいけない点だと思いました。また、教授が忙しく、途中の日誌の返信が返ってこず、コメントを頂けないときもあり、後半になってその分の指導が全部返ってきて、もう少し早くにわかっていたら、もっと実習に生かされたなと思いました。この2点さえ改善されれば、自分自身の成長につながり、より一層実り多き実習になるのではないかと思います。(農端祥子)

8. まとめとして・課題

映像教材については、実習指導において教育効果があることが認められたが、今後はどのように蓄積していくかが課題となる。今回は外部に撮影を依頼したが、実習は短期間に集中して始まるために一度に多くの映像を集めるとなると多くのスタッフが必要となる。また、撮影するとすぐに大学に映像を持ち帰り、一定の教材化のプロセスを踏んで、学内の指導に用いるというかたちをとったが、学生が実習現場の指導者とともに撮影して、現場で即座に実習の様子を再現して評価を得るといった仕組みも必要であろう。それら現

場指導者の評価と大学の指導者の評価をあわせて、教材化をすすめることが求められる。

実習日誌の遠隔地指導では、学生のITリテラシーの力を踏まえて、日誌の様式のベースにはWordを用いた。また安定したデータ送信状況を確保するため、モバイル電話通信を用いて、メールに添付するかたちで学生・実習先指導者・大学教員の三者でやりとりをした。しかし、作成された日誌の様式に学生が書き込んだ内容をキーワードで検索できるように設定されているため、データの容量が大きく、一回の通信に約4分弱と通信時間が非常にかかってしまった。また、メールに添付しての通信であるため、学生が日誌を仕上げた実習先指導者に送り、実習先指導者が日誌にコメントを書き、大学指導者に転送、大学指導者がコメントを書くと各学生と実習先指導者に送付するという体制をとったが、データの管理が非常に煩雑なものとなった。三者が同時に書き込めるような仕組みが必要であろう。また、学生が書く日誌の内容を指導者が訂正した場合に、上書きをするとその履歴が様式上に残らないということも課題として挙げられた。そして毎日の日誌指導を行うということは、施設の担当者、大学の教員ともに負担が大きいことは想定していたが、学生の感想にもあるように、日誌の返事が滞り、学生に迷惑をかけてしまったことも大きな反省である。

さて、今回の取り組みは長期的には、実習の諸記録をデータベース化するという大きな目的として置かれていた。教育の現場では、例えば小学3年生の理科のある単元ということになると何をどのように教えるのかという枠組みが明確になる。また、授業時間という枠組みでその場面を明確に時間というもので切り取ることもできる。さらには、固定された実習指導者は常に実習生とともにいて、実習生の目前で授業や指導の姿を観ることができる。しかし、保育や施設養護の

現場では、そのような教育の現場にはない異質なものを内包している。確かに保育所では設定保育というかたちでの内容と時間の切り取りや、指導者の位置は学校と近いものがあるが、とりわけ生活型の施設では一日の流れというスパンで起床・食事等のプログラムという生活行為の枠組みだけしかない。また指導者も24時間365日を交替制で勤務しているため、固定した職員がいつも学生とともにあるというわけでもなく、学生が実習をしているときに勤務している職員が指導者となることも多い。そして何よりも、例えば子どもが食事を摂っている場面を想像してみると、食事のすまないうちを目の前にした場合、その子どもに熱があるのかと観ると、それは「看護学」である。嫌いなものでも成長発達のためには摂らなければならないと観ると、それは「栄養学」である。また、何か心に心配事があるのかと観ると、それは「心理学」であり、食事をしっかりと摂る生活習慣が大切と観ると、それは「しつけ」であり、「教育学」である。保育や社会福祉の援助の場面には、さまざまな「引き出し」が求められる。それは「当事者の生活」という広範なものを対象としているからであり、その子どもの今ここの状態を前にして、どのような引き出しから、その子どもを観て、何を当てはめ、かかわってい

くのかということが、つまりは専門性であり、それができるのがベテランの職員ということになる。ここに、社会福祉の現場で学生が実習を行った諸記録をデータベース化する意味がある。一日の保育、一日の施設生活というあいまいな時間的スパンの中での場面の切り取り、その切り取られた場面に内包される多様な角度からの引き出しこそ、私たち養成者が教えなければならない事柄である。学生が実習を行った諸記録は、そのような引き出しを研究し、学生と一緒に学ぶべき必要なデータとなるだろう。(農野寛治)

注

- 1) 保育士養成資料集第42号「効果的な保育実習のあり方に関する研究Ⅲ－保育指導のミニマムスタンダード」全国保育士養成協議会発行 2005年
- 2) プログラム全体の詳細については、「ニーズに基づく人材育成を目指した e-Learning Program の開発 実践力をつける実習教育統合支援システム 平成18年度成果報告書」大阪大谷大学発行、2007年を参照のこと。
- 3) “アノテーション付与”とは、あるデータに対して関連する情報(メタデータ)を註釈として付与することである。本稿では、実習ビデオを閲覧した際に、そのビデオに対するコメント・評価データ等をビデオの時間位置情報を伴って付与することを指す。